

アレルギー・リウマチ科

1. スタッフ（平成20年度）

科 長（教授）	箕田 清次
副科長（准教授）	岩本 雅弘
外来医長（助教）	釜田 康行
病棟医長（助教）	長嶋 孝夫
医 員（教授）	岡崎 仁昭
医 員（准教授）	吉尾 卓
病院助教	青木 葉子
病院助教	大西佐知子
シニアレジデント	5名

2. 診療科の特徴

平成12年4月1日をもって当科の診療科名をアレルギー膠原病科からアレルギー・リウマチ科へと変更した。そのせいもあって、リウマチ患者の紹介数が非常に増加してきた。これは後述するように当科が取り組んできた病診連携の促進が結実してきたことによると考えている。

当科で取り扱う疾患はおしなべて全身の諸臓器に問題が発生する可能性を有している。膠原病そのものが多臓器疾患であること、およびその治療法の多くが免疫を抑制するために合併症として感染症を引き起こす頻度が高いことが原因である。したがって当科の最大の特徴は全身管理能力を問われることであり、ただ単に膠原病の診療にとどまらない。この点で診療内容は総合診療部に類似していると言えるが、この全身管理能力の習得という点がレジデント教育において最大の到達目標であり、当科の第一の特徴でもある。

関節リウマチの治療は欧米に比べ我が国は約7年間遅れていたが、我が国でも生物学的製剤が4種類導入されて、飛躍的に進歩した。現在までに当科で導入した生物学的製剤使用患者数は平成20年末の段階でレミケード226例、エンブレル183例、ヒュミラ16例、アクテムラ25例に及ぶ。その80%以上の患者で非常に満足できる治療効果が得られており、栃木県のリウマチ治療の改善に大きく貢献したと自負している。さらには臨床治験にも開発段階から積極的に関わり、より多くの治療困難症例のQOL改善に貢献した。

20年度においても病診連携の更なる充実を目指して診療所との交流を深めた。現在では栃木県全域に連携網が確立し、近隣県を合わせると97施設が当科と協力関係にある。患者の紹介を受け、治療が難しい初期の段階での治療を当科が中心になって行い、安定した段階で連携施設での治療へ移行する。その際、大学附属病院の役割は緊急事態に備えることであることから当

科でも低頻度ながら併診を行うこととしている。そのことで患者は診療所と大学という利便性と安全性を確保できることになると考える。患者にも十分納得が得られ、また少ないマンパワーの当科においても、治療困難な重症例に注力することができた。

ジュニアレジデント教育に関しても力を注いでおり、他の内科各科では行っていない外来研修を取り入れている。新患をまずジュニアレジデントが診察し、患者の問題点、鑑別診断、検査計画などを短時間に把握させ、その後、教授または准教授が教育（precept）しながら患者を診察する方法である。入院患者の場合はすでに診断が下されている症例が多く、短時間に患者の有するさまざまな問題点を把握するという訓練がなかなかされないのを補う目的である。

平均在院日数の低減は昨年と同程度の達成率を得ることができており、長期にわたる入院でしばしば遭遇するQOLの低下を防ぐことができていると信じている。リウマチ膠原病は一般的には平均在院日数が多い診療科である。当科の平均在院日数である14～15日は全国レベルでも最も少ないレベルであると判断される。

認定施設

日本リウマチ学会教育施設
日本アレルギー学会教育施設

認定医

総合内科専門医	箕田 清次 岡崎 仁昭 岩本 雅弘 長嶋 孝夫
アレルギー学会指導医	岡崎 仁昭 吉尾 卓
アレルギー学会専門医	箕田 清次 他4名
リウマチ学会指導医	箕田 清次 吉尾 卓
リウマチ学会専門医	箕田 清次 他5名

3. 診療実績

1) 新患者数・再来患者数・紹介率

新患者数	772人
再来患者数	12,802人
紹介率	62.7%

2) 入院患者数（病名別）

関節リウマチ	208人
全身性エリテマトーデス	85人
シェーグレン症候群	37人
強皮症・CREST症候群	53人
多発性筋炎・皮膚筋炎	25人
血管炎症候群	34人
混合性結合組織病	18人
抗リン脂質抗体症候群	11人
リウマチ性多発筋痛症	11人
ベーチェット病	7人
I型アレルギー性疾患	14人
成人Still病	19人
不明熱	2人

総数：524人（重複あり）

3) 手術症例病名リスト

急性虫垂炎（全身性エリテマトーデス）	1例
急性胆嚢炎（強皮症）	1例

4) 主な検査・処置・治療件数

肝生検	3件
腎生検	6件
皮膚生検	4件
唾液腺生検	1件
肺生検	1件

5) クリニカルインディケーター

1) 治療成績	
2) 合併症例	
3) 死亡症例	
肺高血圧症	1名
肺炎	4名
ニューモシスチス肺炎	2名
敗血症	1名

6) カンファランス

(1) 診療科内

ミニカンファランスを適宜開催した。

(2) 他科との合同

（アレルギー・リウマチ科、整形外科合同カンファランス）

2月：肩関節疾患の診かた

4月：筑波学園病院リウマチ科 尾登 誠先生によ

る講義 『当院でおこなっている関節リウマチの上肢手術と問題点』

7月：高齢者の関節リウマチ

11月：関節リウマチの頸椎病変

(3) 獨協医大アレルギー内科との合同カンファランス

5月：好酸球増加を伴い腎門部に腫瘤を認めステロイドが劇的に効いたIgG4関連疾患の1例

10月：間質性肺炎が急性増悪した関節リウマチの1剖検例

(4) 病棟看護師との合同カンファランス

病棟での業務上の諸問題（主に安全面）について以下の日程で定期的に会合をもった。

1月29日

3月25日

5月27日

7月15日

9月16日

11月18日

4. 事業計画・来年度の目標

レジデント教育の更なる充実と若いリウマチ医の育成が喫緊の課題である。

リウマチ患者教育をさらに発展させるため、市民講座を繰り返し開催すること、患者友の会とより緊密な連携を行うことなどが来年度の目標である。